

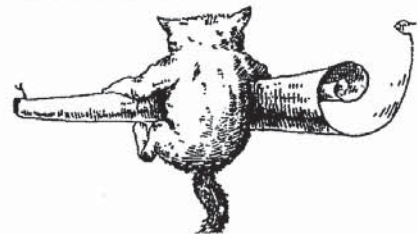
「在外研究を終えて一筋付いたキリスト教と
イタリア人の気質について」

手塚奈々子

在外研究制度によりイタリアのパドヴァで、
パドヴァのアントニオ研究をしてきました。
彼は、13世紀のフランチェスコ会士で司祭・
説教者・同会初の神学教師、そして聖人とさ
れ教会博士ともされています。彼は日本では
ほとんど知られていませんが、ヨーロッパと
中南米ではフランチェスコ以上に知られてい
ます。その研究の中心地・パドヴァで研究で
き、イタリア語で雑誌に論文を投稿できたこ
とは、私にとって本当に恵みでした。さて、
今は私が体験した「根付いたキリスト教」の
有様と「イタリア人の気質」について書いま
す。パドヴァはイタリアでは中堅都市です。
紀元前からある古い街で、パドヴァ大学は13
世紀に創立され、大学と聖アントニオ大聖堂
とジオットによるキリストの生涯が描かれた
スクロヴェンニ禮拜堂で知られる街です。パ

ドヴァに日本人は住んでいません。

パドヴァの聖アントニオ大聖堂には、毎年5
00万人の巡礼者が来て、聖アントニオの棺に
触り（棺桶が祭壇になっており、それに触っ
て祈ると願いがかないます）、腐らない舌を見
ます。（1231年に死んだアントニオの舌が残
っています。説教者としてその舌で神を讃え
たから舌が腐らないと言われていました。他に
声帯も残っています。）ミサは平日で9回、祝
日で11回あります。巡礼者だけでなく、一般
の町の人も、朝6時半のミサにでもよく参加
しています。（他の町ではそんなに多くの人
はミサに来ません。）そして大聖堂ではたくさ
んの典礼行事があります。ノヴェナ（ある祈願
を込めて9日間祈る）を祝日の前に皆で祈っ
たり、皆でロザリオを唱えながら回廊を歩い
たり、大祝日には御聖体や像を担ぐ御神輿の
ようなものが出ます。町の人々にとってキリ
スト教は日常のことで、他の教会も100メー
トル毎位にあります。文化全体にキリスト教
が根付いていると感じました。また、私が
体験して感じたイタリア人の気質は、一言で
言って“Va bene”（ま、いいでしょう）の言
葉に尽きます。イタリア人は、よく会話の中
で“Va bene”と言い、彼らが日常一番使う
言葉だと思います。驚いたのは、約束事が実
行されていない事態の折でも“Va bene”と
言うのです。例えば、電車の故障で特急が来
ない時でも、お客も車掌も“Va bene”でし
た。日本でしたら、駅員はお客にあやまり、
当然料金の差額は払い戻しされるのに。ま
た、電車が遅れるのは当たり前です。（日本
では90秒遅れただけでも事故が起きるくらい、
「遅れてはならない」という強迫観念があり
ます。）イタリアにあるこの“Va bene”は、
日本の神経質な社会（決められていたことを



必ずきちんと敏速に実行しなければ変な人に
思われ非難されるから、必死に時間やいろい
ろな約束事に従って生きている社会だと思
います)に慣れていた私にとっては、最初大
きなカルチャーショックでした。でもすぐに“Va
bene”はとても良いなあと思いました。この
何でも“Va bene”で通ってしまう社会にお
いて、誰かに怒られるとか失敗したらどうし
よう等の恐怖はありません。さすが、シエス
タ(昼寝)のある国だと思いました。私は実
感したのですが、この“Va bene”の良いと
ころは、自分の力に頼らず、すべてを神様
にお委ねするという気質が育つということです。
自分で何とかしようと思っても、それは無駄
な努力、その人だけの問題であって、この“Va
bene”のまかり通るところでは成り行きに任
せるしかありません。こちらも“Va bene”
で生きていく他ありません。しかし、それは
とても楽でした。一生イタリアにいたいと思
えるくらい、気を使わないで生きていくのは、
楽でした。私は日本の社会の方が生きるのに
苦しいと思いました。日本でももう少し気楽
に生きたいものです。

(てづか ななこ 所員・社会学部助教授)

